AI NEXUS

制作サンプル（デモ版・抜粋）

note記事制作 見本記事

テーマ：AIに質問して終わりにしない使い方（完成形の見本）

題材	AI活用の体験記事（架空の読者設定で制作した見本）
納品物	構成案・本文・見出し・太字・図解まで入れた完成形の記事
作成	AI NEXUS
版	見本 v1.0

この資料について：本資料は、架空の題材で作成した制作サンプル（デモ版・抜粋）です。実在のお客様の受注実績ではありません。実際の納品では、ご依頼いただいた内容・書式・言い回しに合わせて、すべて作り替えてお渡しします。

見本｜本文と装飾の例（公開中の無料記事）

「ChatGPT Images 2.6」登場。"キャラが崩れない"画像生成で、副業の作り方が変わる

3．今日から試せる、初心者向けの3ステップ

むずかしい設定は要りません。無料プランでも、今日から試せます。



1つ目．まず「同じキャラ」を1枚作る

ChatGPTを開いて、「画像」を選んで、日本語で頼むだけです。「韓国風の女性インフルエンサー。カフェで微笑んでいる写真風の画像」のように、**人物像を具体的に書くのがコツ**です。

2つ目．背景だけを変えてみる

気に入った1枚ができたら、「背景を海辺に変えて、人物と服装はそのまま」と頼んでみます。ここで顔や服がどれだけ保たれるか。それが、今回の改良を確かめる一番のテストになります。

この3つができるようになると、SNSの投稿画像、noteのサムネイル、商品紹介の画像を、1人で回す土台ができます。でも「**作り続けられる形**」が整うかどうかは、副業の続けやすさを大きく左右します。

※見本用に、公開中の記事原稿から再構成した画像です（実際の記事はnoteで公開中）

公開中の無料記事の装飾例（見出し・太字・図解の入れ方）。納品記事も同じ完成形でお渡しします。

制作メモ

- テーマ：AIに質問して終わりにしない使い方
- 読者：AIに興味はあるが、「質問して終わり」の使い方から抜け出せていない人
- タイトルは工程2で5案出し、対比型＋結論入りの形に決定
- 数字や制度の話は使わず、体験と進め方だけで書けるテーマを選定（事実確認の工程を軽くするためではなく、材料が体験のみの記事の例として）

AI、質問して終わりになっていませんか。私が変えたのは「材料の渡し方」でした

「AIに聞いてみたけど、返ってきた答えが薄くて、結局使わなかった」

私も最初はそうでした。質問を投げると、それらしい答えは返ってくる。でも、自分の状況に合っていないので、そのまま仕事にも記事にも使えない。これを何度か繰り返して、「AIはこんなものか」と思いかけました。

変えたのは、AIへの質問の仕方ではなく、**渡す材料**でした。この記事では、私が実際にやっている「質問の前に材料を渡す」進め方を、順番に書きます。

この記事で分かることは、次の3つです。

- なぜ「質問だけ」だと答えが薄くなるのか
- AIに渡すと答えが変わる「材料」の具体例
- 今日から試せる、小さな始め方

前提：「質問だけ」だと、AIは一般論しか返せない

AIは、渡された情報の範囲で答えを作ります。質問だけを渡すと、材料は「世間一般の知識」だけになるので、答えも一般論になります。これはAIの性能の問題というより、**材料不足**の問題です。

たとえば「noteの記事のタイトルを考えて」とだけ頼むと、誰のどの記事にも当てはまるような案しか出てきません。逆に「この記事はこういう読者に向けて、こういう体験をもとに書いた。タイトル案を5つ」と材料を渡すと、出てくる案の質がはっきり変わります。

大事なのは、質問の文章を上手にすることより先に、**自分の材料をそろえて渡すこと**です。

本体：私が渡している「材料」はこの3つ

私が記事を作るときに、AIへ最初に渡している材料は次の3つです。

- **自分の体験** ― やったこと、起きたこと、失敗したこと。そのままの言葉で書いたメモで十分です
- **実際に確認した数字や事実** ― 使った金額、かかった日数、公式発表で確認した内容など。「だいたい」ではなく、確認できたものだけを渡します
- **記事の結論** ― 読んだ人に最終的に何を持ち帰ってほしいか。これを先に渡すと、AIの出力の向きがそろいます

進め方も決めています。いきなり本文を書かせるのではなく、**材料の整理 → タイトル案 → 見出しの構成 → 見出しごとの本文 → 事実確認**の順に進めます。順番を固定すると、出力のばらつきが減り、確認の手間も減ります。

（この道具一式のプロンプト集は、この順番そのままの形になっています）

本体その2：材料を渡すと、具体的に何が変わるか

私の実感として大きく変わるのは、次の2点です。

1つ目は、**出力に「自分の話」が入る**ことです。体験を材料として渡すと、AIはそれを土台に文章を組むので、どこかで読んだような文章ではなく、自分の記事になります。

2つ目は、**確認がしやすくなる**ことです。材料が手元にそろっていると、AIの出力に「材料にない数字」が混ざっていないか、すぐ照らし合わせられます。材料がないまま書かせると、何と照らし合わせればいいか分からず、結局すべて怪しく見えて使えなくなります。

失敗と注意点：私がやった「渡しすぎ」と「確認なし」

失敗もしました。

1つは、材料を渡しすぎて、かえって指示が散らかったことです。あれもこれもと貼ると、AIがどれを優先すればいいか分からなくなります。対策として、材料は「体験・数字・結論」の3種類に分けて、箇条書きで渡す形に固定しました。

もう1つは、AIの出力を確認せずに使いかけたことです。もっともらしい数字が混ざっていたことがあり、公開前に材料と照らして気づきました。これ以来、**数字と固有名詞は、必ず元の材料と照らし合わせてから使う**ことにしています。確認できなかったものは、書かないか、「確認中です」と分かる形にします。

AIの出力は、下書きとしては優秀でも、完成品ではありません。最後に人の目で通す工程は省けません。

まとめ：質問の前に、材料を3つだけそろえる

「質問して終わり」から抜けるために変えたのは、質問の技術ではなく、渡す材料でした。

今日できる一歩は1つだけです。次にAIを使うとき、質問の前に、**自分の体験を3行だけメモして一緒に渡してみてください**。「何をやったか・どうなったか・何に困ったか」の3行で十分です。答えの具体さが変わるのを、一度体験すると戻れなくなります。

材料を渡す → 分けて進める → 最後に人が確認する。この流れが、私の記事作りの土台になっています。

- この記事は、書き手の体験と進め方をもとにした実践記録です。紹介した進め方による閲覧数・フォロワー数・売上などの成果をお約束するものではありません
- AIサービスの仕様は変わることがあります。操作画面などが異なる場合は、各サービスの最新の案内をご確認ください

この記事とテンプレートの対応表

記事の部分	構成テンプレートの対応箇所
タイトル	1. タイトル案の出し方（困りごと＋結論側の提示、誇張なし）
冒頭〜「分かること3つ」	2. 導入（困りごと／書き手の立場／分かること）
「前提：質問だけだと…」	見出し1：前提・背景
「私が渡している材料はこの3つ」	見出し2：本体その1
「材料を渡すと何が変わるか」	見出し3：本体その2
「失敗と注意点」	見出し4：失敗・注意点
「まとめ」	見出し5：まとめ（結論の言い直し＋今日できる一歩を1つ）
末尾の注意書き	補足（成果を約束しない明記・仕様変更への注意）

※このサンプル自体も、AIと一緒に下書きを作り、人が確認・調整して仕上げています。文章の最終形は、ご自身のテーマと材料に合わせて変わります。

納品について：実際の納品では、テーマ・読者像・材料（体験・数字・資料）をお預かりし、タイトル案の提示→構成案→本文→装飾まで一括で制作します。本見本の文章・設定は架空のものです。